

## 1970年代の建築批評論壇における建築家の主体性に関する議論について

## 長谷川堯の「獄舎性」の概念をめぐって

## Discussion on Architect's Independence in the 1970s Architectural Critics

## On Hasegawa's concept of "Prison"

○八巻健太<sup>1</sup>, 田所辰之助<sup>2</sup>○Kenta Yamaki<sup>1</sup>, Shinnosuke Tadokoro<sup>2</sup>

Modernism occupied its place for about half a century of the 20<sup>th</sup> century, but there was a lot of movement among architects and critics in the 1960s and 70s trying to de-modernize. However, since the 1970s, the era has shifted to commercialism, consumerism, and popularism, and the buildings that have emerged since then have only heard the characteristics of an industrialized society. In order to find the starting point for new considerations in Japanese contemporary architecture, we attempt to return to the modernization discourse in the 1970s. Therefore, I would like to draw a cross section of the architectural trend in the 1970s by focusing on "independence of architects" as the main criticism axis, and add new considerations to the history of Japanese architecture in de-modernization.

## 1. 研究背景

近代主義、いわゆるモダニズムは20世紀のおよそ半世紀の間その座を占めていたが、1960年代から1970年代にかけて脱近代化を図ろうとする動きが建築家や評論家の間で盛んに行われた。しかし、70年代以降、商業、消費、大衆主義へと時代が移り、その後現れる建物たちは産業化社会の顔色を伺うばかりであった。1968年の『日本の表現派』、1970年の『大正建築の史的素描』の論評で当時注目を浴びた、その鮮やかなまでの歴史論評とラディカルかつ斬新な太刀筋による建築批評を行ってきた建築評論家の長谷川堯は著作『神殿か獄舎か』において神殿的思惟と獄舎的思惟という二項対立で状況を分析している。ここで獄舎的思惟は、鳥瞰図の視点により人々を権力的ないし支配的に操作しようとする際に用いるツールあるいはモニュメンタルなものとして建築を模索する姿勢である神殿的思惟とは対置される。長谷川は建築はどこまでも不自由なものとして認識し、その認識の上で建築との身体化を図ろうとする姿勢を特に獄舎性とし、1915年に豊多摩監獄を設計した後藤慶二と大正時代の思想家である大杉栄をその思想の体現者として挙げている。

## 2. 研究目的と方法

長谷川堯が『神殿か獄舎か』を論じた1970年代は「獄舎的なもの」の言説が議題の中心に座していた。また、それ以降この思惟は商業・消費主義の渦中であって衰退していく。長谷川は後藤慶二や日本の表現派を例に挙げ、建築家の主体性を一つの軸に「自己の拡充」<sup>1)</sup>による建築家の想像力の豊潤さを半世紀もの時空を超え訴えている。その長谷川論から半世紀に差し掛かる現

代において人間の主体性を建築が担うために、獄舎性を再度問い直し、また現代における主体性の在り方を明らかにし、獄舎的思惟の上で建築が存在し得る可能性を模索していく。インターネットが普及しスマホ社会になった現代において、空間自体の存在意義は中々に捉えづらくなっている。果たして建築とその内部で生成される人間のますます発達した「知情意」の拡充は現代においてどれほどに「潜勢力」を宿しているのだろうか。本研究では1970年代に謳われた獄舎的なものの言説と長谷川堯が言及する獄舎性の思惟を紡ぎ出す。以下、二次資料、一次資料(主に『建築文化』の論考から抜粋した言説を中心)をもとに各々の建築家、評論家らの批評、思想と時代傾向をオーバーラップさせ考察していく。

## 3. 長谷川堯の「獄舎的思惟」について

## 3-1. 内からの視座

長谷川堯は白井晟一の自邸「虚白庵」へ見学に行った時のことを次のように回想する。

「招じ入れられた屋内は、そこに生棲するあまりの昏さによって私に何も見せなかった。(中略)漆黒の暗闇の中にひとり端座しながら、白井氏はそこにいつも誰かを見ている。(中略)一人の建築家の自邸の私的な空間が何者かに捧げられているのだ。」<sup>2)</sup>

また長谷川は同じ文章で「ひとは住まうものとして物質を自分の前に立てる(否定する)ことによって、超越する人間存在のプライマリーな出発を経験する」<sup>3)</sup>と語る。ここで白井は自邸を建てることによって、自らを閉じ

1: 日大理工・院(前)・建築 2: 日大理工・教員・建築

込めることによって成った人間として、設計者のポジションを取っていると捉えられるだろう。

### 3-2. 主体的存在への道のり

長谷川堯は、大正期の思想家である大杉栄が、建築家後藤慶二によって設計された豊多摩監獄に入獄していた時のことを語った文章を次のように引用している。

「故郷の感じを初めて監獄で本当に知ったように、僕の知情意はこの獄中生活の間に初めて本当に発達した。(中略)そして一切の出来事をただ感傷的にのみ見てそれに対する自己の実行の上に現すことのできない囚人生活によって、この無為を突き破ろうとする意志の潜勢力を養った。」<sup>4)</sup>

この大杉の言葉から読み取るに、監獄、つまり娑婆との絶対的な切断と同時に「監獄人」となる者の収容施設はその「外閉内開」<sup>5)</sup>的な建築空間へと姿を現す。またそれに伴い監獄は監獄人の身体の一部となり、あるいは監獄人が監獄の身体の一部となる。ここで先にある大杉の言葉通り、監獄人は「自己の拡充」に没頭する。さて、近代主義では「人間」と「自然」を二分化するところに基本的な性格があったのだが<sup>6)</sup>、それは人間が自然を客体的存在として認識するところから始まる。このような考えは建築、都市にまで向けられる。これらの状況に対し建築評論家の藤井正一郎は、「自らの身体が環境とともに一つの意味ある全体をなすという生き方を我々は忘却している」<sup>7)</sup>と指摘する。人間が客体的にではなく、主体的に生きることを意味を説こうとしている。この主体的に生きる存在はもちろん建築を創造する者にも言えることである。次に引用する文章は我々に十分に示唆を与えてくれる。

「建築家も一人の主体的な人間である限りにおいて、自分の行動を世界に投げ込むことによって現実を突き抜けてゆく人々の一員であるが、そのことを特に建築を介在させることによって果たす人々を建築家というのである。」<sup>8)</sup>

建築家後藤慶二は監獄を設計する際に自身の前に壁をたてそのものの内に身を宿したに違いない。そして自らシャバへの断絶に思索を浸らせ、さらにシャバへの憧憬とでも言える感覚に巡り会えたかもしれない。そうして出来上がった豊多摩監獄は監獄建築として大変よくできたものとなったのである。つまり後藤は監獄づくりとして自らを監獄へと閉じ込め監獄人になった

と言えるのではないか。そういった意味で豊多摩監獄は後藤の感覚が宿された、もっと言えば後藤の化身とでも言える、あるいは後藤の身体そのものとも言えるだろう。囚人部屋の暗さ、その壁を前にした際の思惟の広がり、またその浸り方、囚人同士のコンタクトの数々、看守の声、シャバへの憧憬、罪への意識、脳裏をかすめる脱獄意思、獄中生活の苦悩と心地よさ…、これらを経験して獄舎づくりをおこなった監獄人は、思考や着想といったものを優に超える主体的存在となったのである。

### 3-2. 脱「上からの視座」

「ともかく建築家は自己を回復するために、『医師的視座』から発する〈共同体〉の空間化の試みと、その治療手法としての『かた』(普遍的論理)の普及というあまり実りの期待できない願望を一刻も早く放擲しなければならぬと私は考える。」<sup>9)</sup>

長谷川堯は上の文章で菊竹清訓の設計手法について批判的である。ここで「医師的視座」とは上からの視座と捉えて良いだろう。長谷川は「上から外から」ではなく「下から内から」の視座を希求している。

## 4. 終わりに -現代における獄舎性の希求-

1970年代以降の商業主義、消費主義、大衆主義などの潮流は現代まで衰えることはない。また近代主義の基本的なパラダイムであった客体論的な展開は未だ拭えずにいる、この近代主義の残り香と70年代以降の一貫したベクトルの先に我々は立たされている。今や情報化が進みこれらの潮流をやむなく受け止め商業・消費主義の華やかで自由なものへの憧憬をみる建築技術者たちは選択可能なひとびとのための、また誰のものでもない建物をつくることに余念がない。こういった事態は作り手と建物と受けてとが乖離してしまう。この事態を払拭するための戦略的行為としての可能性を長谷川堯が謳う「獄舎性」が持っていることは、今後の建築を考察する上で大きく示唆に富むものであろう。

### 注

1) 『神殿か獄舎か』において長谷川堯は後藤慶二の建築家としての特徴の一つとして「自己の拡充」を挙げている。2)長谷川堯『建築の出自』(父)の城砦と青春の(子)の円熟 鹿島出版会 2008 3)前掲 4)長谷川堯『神殿か獄舎か』相模書房 1972 5)『神殿か獄舎か』において長谷川堯は外に閉じ内を開く性向をもつ建築を特に外閉内開性と論じている。6) 瀬尾文彰「(ただひとつの空間)による反建築試論」『新建築』1971年10月号、pp.257-264 7) 藤井正一郎「人間が自らの身体を生きる「場」たれ」『建築文化』1971年7月号、p111 8) 瀬尾文彰「(かたち)への道程:3 形態化の論理」『建築文化』1973年6月号、p86 9)長谷川堯『建築の出自』「天下りする建築の(降臨)のゆくえ 鹿島出版会 2008